慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ダンテ・ジェルミーノ著『イデオロギーを超えて：政治理論の復活』
Sub Title	Dante Germino, Beyond ideology : the revival of political theory
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1970
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.43, No.7 (1970. 7) ,p.132- 136
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19700715-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

産分与制度の機能が阻害せられることになるのである。

夫婦の財産問題は、理論の問題のほかに、現実の事情と要求とによつて、解決の極めて困難なものとなつて居る。従つて人見君が、これに対する解決を提示し得なかつたのは、寧ろ当然である。しかし同君が、比較法的見地に立つて、夫婦財産法の検討を行い、その展開に対する所見を述べられたことは、学界に寄与することが少なくないと思う。

（A5判、二八四頁、二二〇〇円、鳳舎刊）（小池　隆一）

Dante Germino,

Beyond Ideology : The Revival of Political Theory

New York, Evanston, and London, Harper & Row, 1967, ix＋254 pp.

ダンテ・ジェルミーノ著

『イデオロギーを超えて――政治理論の復活』

政治学は幸福な状態にあるのだろうか。不幸な状態にあるのだろうか。およそ幸不幸というようなことは、主観的な、したがつて文字通り個人的な水準で判断され推量されるべき問題であるから、アカデミックな領域において右のような問いは有意味ではない。だが、それと同じことが実際には、「没落」とか「復活」「超克」といつた言葉で語られ、読者の嘆声を洩らしていることも少なくない。ジェルミーノの本書はその一例である。しかも彼の場合、政治学――後述するように、それは政治理論あるいは思想と言つてもよい――が不幸な状態にあるというのは、たんに世俗的な堕落という意味にとどまらず、超越的・宗教的信仰による甦りを予定しているがゆえに、一層深刻なものに感じられる。

第一部「政治理論の性質」において、著者は政治理論の没落という現状認識を検討し、政治理論の伝統（あるいは正統と言うべきか）を復元してみせる。プラトンからヘーゲルまでの偉大なる思想家たちが探究したものは、*epistêmê politikê* であつた。政治理論の *theoria* とは、空虚な観照や情動的嗜好ではなく、まさに真理を見究める精神活動である。党派性とか直接的な実践にかかわりなく、また《事実》と《価値》の二分化による擬似客観性に陥ることなく、永遠のアポーリアに挑もうとするものだ。それこそ世界における人間存在である。ジェルミーノは、ジャック・マリタンの「神中心的ヒューマニズム」と「人間中心的ヒューマニズム」という二つの伝統の区別を採用しながら、後者の狭隘なパースペクティヴを批判する。内在的超越はメシア的ヒューマニズムに連なり、所詮、*libido dominandi* が顕在化した現代の全体主義イデオロギーの病いに罹らざるを得ないのだ、と。勿論、著者は人間の悪を否認せず、人間存在の全的意味を把えようとする「政治理論は、古代・現代のいずれを問わず、世界はあるがままであり、そのほかの何ものかではない

ことを気づいている。政治理論の課題は *conditio humana* を叙述することで、原理的に不可能であるものにそれを形態転化しようとする誤つた試みに携わりはしない。それゆえ政治理論家は、メシア的ヒューマニズムの諸党派と対照的に、リアリストであつて、あるがままの政治的人間を、その偉大さと頽廃、栄光と卑劣、善と悪とにおいて描写するための適切な諸概念を発展させようと努めるのである」と言われるように。

authentic な政治理論に価するものはすべて、このような探究に基づいて模範たるべき社会のモデル構築を試みてきた。ジェルミーノによれば、過去の西欧における思想的伝統、理論的省察にはつぎのメルクマールが指摘され得る。

（1） 開かれた態度。人間の経験と可能性にはさまざま異つた水準があるが、「政治活動の同時代の世界からの批判的距離」、「理論家とその環境とのあいだのある緊張」を保つ能力が《開かれた態度》である。政治理論家は批判者として、偶像破壊的でもなければ現実に満足してもいない。ある特定の体制の市民参加者であると同時に、その証人であり審判者である。

（2） 理論的志向。政治理論家は現実というものを理解するのであつて、操作・支配への *hybris* にけつして屈服しない。純粋な *epistēmē politikē* を希求すること以外に目的はないのだから。

（3） 永遠普遍な問題への焦点。「人間とは何か」、「どのような社会が人間性の完全な発展のために要求されているか」、「個人と社会にとつて正しい秩序の原理とは何であるか」。理論家がつねに直面するのはこうした永遠の問題であり、焦眉の論争ではない。政治評論家との相違はこの点にある。J・ボーダン、ド・メーストル、E・バークなどその例だが、マキァヴェリ、ホッブス、ルソーはいわゆる *libres de circonstance* を書いたのではない。

（4） リアリズム。政治理論家はユートピア的社会工学者ではない。彼は自己の理論を現実に強制するのを避け、批判的分析にとつての模範を提示するに止まる。その限りにおいて、彼は経験的かつリアリスティックなのである。

（5） 謙虚さ＝知識の限界の認識。政治理論とは自己完結した、閉ざされた体系ではない。*philosophia perennis* はそれ自体未完の課題なのだ。人間存在に関するいかなる深遠な知識でも、超越的存在の実在性をドグマティックに否定せず、さらにみずからを批判にさらす。無謬なる *gnosis* に到達したと僭称する者は、メシア的ヒューマニストに他ならない。

（6） 知的廉直と誠実。理論家は現実の欺瞞、無知をあばき出す。そして、到底実現不可能な予言とか約束を行わない。このことが彼を誤解させ、顰蹙をかうこともあろう。彼が過ちを犯さないとは言えないだろうが、奇を衒つて自己を韜晦する誘惑を拒もうとする意識的な努力、それこそ彼の知的・道徳的誠実さの証しである。

以上の如き真正な政治理論が蝕まれだしたのは、フランス革命から第二次大戦にかけてのヨーロッパ思想のイデオロギーの昂揚であつた。第二部「政治理論に対する攻撃」は、トラシー、コント、マルクスのイデオロギー的還元主義と、論理実証主義および言語哲学

を取りあげ、《没落》の思想史を披歴する。ジェルミーノのイデオロギー批判は恰かも反抗者に加える懲罰、そして異端糾問のごとく、イデオローグとは神となつた人間自身の新しいプロメテウスだ、と言う。トラシーの《思想の科学》は *sentio ergo sum* に置換えられた抽象的思考にすぎず、ナポレオンの軽蔑はもつともなことである。コントの科学主義的メシアニズムはイデオロギーにさらに加えて、実証主義を旗印とし、《社会学》をもつて人類の司祭の新しい学問に見立てる。一切の倫理、形而上学、神学の議論を無価値と断定し、*savoir pour prévoir* というスローガンを掲げて、科学の実践への奉仕を唱導する立場は、マルクスにいたつて極点に達する。「哲学者たちは世界をいろいろに解釈してきただけだ。肝心なことは世界を変革することである」（フォイエルバッハ・テーゼ十一）。マルクスのイデオロギー的還元主義は、このようにラディカルに表明される。若きマルクスの作品がどうであれ、彼にとつて人間の本質は *praktische menschlich-sinnliche Tätigkeit* 以上のものではない。ジェルミーノの強調したいことは、『共産党宣言』の綱領が『ポリティア』にとつて代り、共産主義革命への権力闘争という *praxis* が *bios theoretikos* の死をもたらした不幸である。

コントが「社会科学の実証化」にあたえた影響は尨大である。とくに今世紀二〇年代以降、ウィーン学団を中心とする論理実証主義の運動は、科学的方法の発展に貢献してきた。だが他方で、それがあらゆる命題を検証可能性と感覚的経験に限定し、形而上学を一切排除する「反形而上学的形而上学」となる傾向を免れなかつた。コント流の還元主義にもまさるドグマティズム、研究の内容より方法を問題視する *methodolatry* といつた非難も受けている。論理実証主義とともに言語哲学も、哲学の課題を言語の混乱を明晰化することに限定し、いわば《イデオロギー曝露》の役割を演じてきた。政治思想の言語分析――例えばT・D・ウェルドンの『政治の論理』――は、確かに十九世紀の傲岸な体系を徹底的に破壊したが、現実の政治的、それゆえ恣意的な活動から遠ざかる保守主義となつた。こういう実証主義とイデオロギーの知的雰囲気のなかで、マックス・ウェーバー――アーノルド・ブレヒトもそうだが――は鋭い感受性をはたらかせ、事実と価値のディレンマに最も深く悩まされた。社会科学は実証主義的であり、まさに *wertfrei* であるべきだが、それはまた *Wertbezogenheit* であるのだ。《社会的認識の客観性》に苦心した彼は、*Gesinnungsethik* と *Verantwortungsethik* とを峻別し、非合理的、イデオロギー的思想と行動を厳しく拒絶した。政治理論の復活にとつて、著者はウェーバーの知性の高みを賞讃している。

政治理論にとつてはまことに荒涼憮然たる、この不幸な時期にあつて、なお正統な系譜を引き継いでいた思想家たちが幾人かいた。第三部「難を免れた残存者――イデオロギーと実証主義の時代における理論的パースペクティヴの生存」では、クローチェ、ベルグソン、ジュリアン・バンダ、マックス・シェーラー、さらにニコライ・ハルトマン、アルフレッド・ホワイトヘッドなどの貢献があげられている。政治理論プロパーの領域においては、モスカ、パレート、

ミヘルズのエリート理論がそうである。右三人に加えて、グィド・ドルソ（Guido Dorso）は、イタリア以外に未知であるとはいえ、最もソフィスティケートされたエリート理論を定型化し、それを包括的な哲学的人間学のなかで考察した、とジェルミーノはその《批判精神》を高く評価している。彼はムッソリーニの正反対であり、同時代の共産主義的知識人アントニオ・グラムシとも異つていた。彼はいかなる理論モデルも《発展的構図》も描かなかつたが、デモクラシー的言辞を弄せず、デモクラシー体制においてすら、政治階級――全人民でなく――が支配することを確証する。その代表作は『政治階級と支配階級』（Classe politica et classe dirigente）である。ドルソは、階級闘争という概念を拒否して、政党の政治闘争（*lotta politica*）への洞察によつて、人間の実存的現実性に迫つたのである。

第五部「政治理論の復活」は、「現代における政治理論の復活――オークショット・アレント・ジュヴネル・シュトラウス」および「エリック・フェーゲリンの現代理論に対する貢献」の二章より成つている。第二次大戦の終結このかた現在にいたるまで、活躍中の政治理論家たちである（彼らの学問的業績はつい最近まで我が国においては未知であり、学界の一部で注目されていただけだということも、政治思想の「伝統」、というよりその研究の特殊性を反映しているかに思われ、奇異の感にうたれる）。彼らはイデオロギーと全体主義の時代苦をつぶさに体験してきた。彼らはこぞつて政治的メシアニズムを拒否する、だが人間存在の複雑な問題に鮮明な解答をあたえずに。オークショットは、経験の多面的次元を認め、詩と歴史に繊細な想いを馳せる懐疑主義者である。人生体験のアポーリアを、新しいヒューマニズムを求めて、現代という危機に情熱的に立ち向おうとしているのがアレントだ。権威、道徳、教育という伝統的な問題に対して、政治理論家としてジュヴネルは犀利な筆をふるつている。政治理論復活のきざしに、他の誰よりも影響力をあたえているのはシュトラウスであろう。《シュトラウス学派》といつたものが一定の教義を共有しているわけではない。しかしながら、古典へのロマン的自己耽溺に終ることなく、現代の実証主義的傾向――それは価値中立的であることを宣言しつつも、ドグマティックな無神論や放恣な平等主義と歩調を合わせている――に対して、政治哲学の偉大なる伝統の原義的解釈へと回帰する必要性を、数多くの彼の労作は証拠立てている。さらに、近代西欧をグノーシス的象徴形式のあらわれとし、フローラのヨアキムからマルクスまでの誤謬を鋭く抉るのはフェーゲリンである。彼は *philosophos-spoudaios* と *cognitiofidei* に導かれて、神中心的ヒューマニズムの極点に佇む。

「神と魂」を犠牲にした近代の危機は、イデオロギーの誘惑にみずからを犠牲にしたのだが、非全体主義世界の内部にも、さらに徹底した「政治における行動主義的説得」が効を奏しつつある。ウルトラ・モダンな行動主義政治学といわれる学派――サイモン、ラスウェル等――は、《ソフト・メシアニズム》という形態をとつて閉ざされた社会をめざしている、とジェルミーノの批判は殊更厳しい。第五部「政治理論と閉ざされた社会」は、これに対抗して新しい自由主義――神中心的自由主義と呼ばれているが――を提唱する。先述

した政治理論の諸特性を生活、仕事、思想のうちに顕現する未来の課題は、アメリカの学者（出ヨーロッパの人びとを含めて）によつて遂行されねばならない。イデオロギーを超えて、超越的基礎に向う開いた態度で、実存する人間個人の現実性に焦点をあわせながら。ポスト・モダンな世界の彼方には、開かれた社会があるだろう。

古典ギリシア哲学、ユダヤ教、キリスト教における *metanoia*、そのなかで考えあぐんでいるジェルミーノから、エレミアの嘆きが聞えてくるような気配である。政治理論の惨めな、不幸な現状への糾弾には、彼の崇高なヴィジョン、一点の欺瞞もない誠実さが透視できよう。彼の流麗な表現を正しく伝えることは無理である。ただ、彼の意図するところは理解されるだろう。それと同時に、理解はできても素直に受け容れ難いと思われる、あるいは逆に反感を誘うかも知れない、という危惧も残る。それはなによりも、著者自身の価値的コミットメントが西欧中心的であるからだろう。「ポスト・モダンな時代は、現代人の諸問題に対して偉大な思想的・精神的巨匠たち——東と西の双方の——の発見をふたたび適応する可能性と新鮮な企てに溢れた時期であろう」と述べられてはいるものの、実際には、普遍的文明のための政治理論の復活というには偏頗にすぎる正統性の主張であるからだ。たとえそうではなくとも、彼の判断自体は、その意に反して、あまりにも主観的な自己発見にすぎない、と受けとられがちである。フェーゲリンを《ファシスト・イデオローグ》と批判する誤解を弁ずる彼ではあるが、少なくとも思想の水準において、ファシスト的という形容は不当であろうけれど、彼はナルシシスト的イデオローグと映じはしないだろうか。「イデオロギーを超えてというイデオロギー」といつた煩瑣な表現は好ましくないが、ジェルミーノには鏡のなかの自分を合わせ鏡で眺めているようなところが覗える。

（奈良　和重）

Lucian W. Pye and Sidney Verba, eds., Political Culture and Political Development

Princeton University Press, Princeton, New Jersey, 1965, x＋574 pp.

L・W・パイ、S・ヴァーバ 共編『政治文化と政治発展』

はじめに

本書を紹介し批評することは、おそらく不可能であろう。それは、私自身が「政治文化概念の成立と展開」（『法学研究』四三巻一号、昭和四五年一月）と「政治文化と政治変動」（秋元律郎・内山秀夫共編『現代社会と政治体系』所収、時潮社、昭和四五年）の二編の論考をもつてしても論じえなかつたほどの展開途上の概念を集約的に論じきたり